人間にとってたばことは何か

― 近現代の日本の喫煙と禁煙の歴史を事例に ―

三浦　宏子
MIURA Hiroko

『歴史遺産研究』第12号　東北芸術工科大学歴史遺産学科（2018年3月）抜刷

人間にとってたばことは何か

── 近現代の日本の喫煙と禁煙の歴史を事例に ──

What Tobacco Means for Humankind
A Study of Smoking and Anti-Smoking in
Modern and Contemporary Japan

三浦　宏子　MIURA Hiroko

要　旨

既存のたばこ研究をもとに歴史と文化の大枠を見ていくことでたばこの概要的な要素についてまとめる。植物としてのたばこの側面から、嗜好品としての位置付けを確認し、世界各地で需要され様々に変貌を遂げた歴史を見ていく。さらに日本におけるたばこの歴史を細かく見ていく。たばこがいつ頃、どのように受け入れられ、どのようなイメージを付与されてきたのか、どんな存在で誰が吸っていたのかについて先行研究を用いて論を進めていく。健康への害から嫌悪される対象となったたばこについて、政府の取り組みや禁煙化の取り組みの現状を見ていく。さらに喫煙をするしないに関わらず、現代の若者である大学生に聞き取り調査とアンケートを実施し、その結果と考察を述べていく。論を進めていくにあたってとる立場として、喫煙を全肯定し推奨しているつもりもなければ、否定するつもりもなく、あくまでも中立的立場をとる。本稿でのたばこの表記についてであるが、植物としてのたばこのみをカタカナで表記し、それ以外には全てひらがなでたばこと表記する。

キーワード：たばこ　文化　衛生観　嗜好品　嫌悪

1．はじめに

たばことは不思議なものである。世界中どんな地域、どんな文化圏のなかでも様々な形で人々に嗜好され、たばこにまつわるものがさらなる文化として成立している。

たばこにはあらゆる側面がある。その薫る煙は、古くは神との交信の手立てとして用いられるとともに、病への対抗策として薬のようにも扱われた。やがてヨーロッパへ渡り、次第に地球全体へ伝播してゆくが、その過程であらゆる喫煙方法が生み出された。用いられる道具は喫煙行為が社会的なものであるかのごとく、職人技と芸術性に富んだものとして、それぞれの土地で磨かれていくことになる。日本のキセルや中国の鼻煙壺や中東の水パイプのように。

しかし、現代ではたばこを吸う人と吸わない人の間で論争が絶えない。互いが権利を主張し、吸う側の論理と吸わない側の論理がぶつかり合っている。それは、単なる好き嫌いの問題から、たばこが吸う人だけでなく吸わない人の身体へも影響するという点や、マナーや振る舞いが複雑に絡み合っているからである。

今日では、たばこは「健康」という観点によって、絶対悪のような立場に立たされていることが少なくない。医学という権威が定めた基準によって、「健康」が均一化している中で、喫煙行為は「健康」を害するものとしてのみ位置付けられている。値段も高くてあらゆるコストとリスクのあるたばこは、百害あって一利なしと片付けられ、喫煙者の立場も日増しに肩身の狭いものになっている。本稿では、たばこの歴史と文化的側面をめぐるとともに、聞き取りやアンケートの手法を用いて人々にとってたばことはどのような存在なのかを考察していく。さらに、喫煙に関する社会現状や政府の制度的な取り組みをめぐって、寛容さを徐々に失いつつある社会を明らかにし、嫌悪やメリットのなさだけで文化という認識を見失ってしまう社会への問題提起することが目的である。

2. たばこの歴史と文化

2-1　植物としてのたばこ

たばこはナス科のたばこ属の多年草である。直接の語源はスペイン・ポルトガル語で「tabaco」である。たばこ自体は紀前5000～3000年ごろ南米のアンデス山脈で栽培されたのが起源で、15世紀にアメリカ大陸からヨーロッパに伝えられた。以来世界各地で栽培されるが現在では中国でもっとも栽培されている。日本での主なたばこ産地は黄色種で南九州、バーレー種で北東北となっている。

たばこはナス科たばこ属に分類され、現在、栽培2種、野生種64種、園芸種１種の計67種が確認されている。今日世界各地で栽培されているが、その2種がニコチアナ・タバカムとニコチアナ・ルスティカである。

タバカム種、ルスティカ種いずれも原産は南米アンデス山脈であり、他にも野生種43種も南北アメリカで見られることから、たばこ属の故郷はアメリカ大陸と考えられる。最も広く栽培されている代表的なものがニコチアナ・タバカムである。我々が普段たばこと呼ぶ種であり、気候や用途によって多くの品種がある。1～3mの高さに育ち、大きな葉をつける。味はマイルドで葉を葉巻状に巻いて喫煙したというのが始まりであったとされる。

一方、ニコチアナ・ルスティカ(マルバたばこ)は背が低く、小さく肉厚な葉をつけ、ごく限られた地域でのみ作られている。ルスティカ種は耐寒性を持つことからメキシコ以北から北米東海岸セントローレンス河にいたる地域で栽培、自生している。葉が小さく味も辛いことから、タバカム種のように直接巻いて吸うには適さず、腕を曲げたような形状のエルボウ・パイプや火皿を備えたパイプで吸うことが主流だった。このように種によって喫煙形態が違ったことが明らかとなっている。

2-2　嗜好品としてのたばこ

かつては神との交信のための道具や、薬としての役割を担っていたたばこであるが、現在では嗜好品という位置付けが基本構造になっている。たばこがどういう存在であるかについて考えるために、まずは嗜好品とは何かについて明確にしておく必要がある。

嗜好品とは、一般にたばこや酒、コーヒーや茶のことを言う。広辞苑の広義によると「栄養摂取を目的とせず、香味や刺激を得るための飲食物」と定義されている（新村 2008）。香味要素だけのものは、お菓子や清涼飲料水などで、薬理作用だけのものには、麻薬がある。嗜好品はそれら二つの要素を併せ持つことが特徴である。

嗜好品文化研究会が嗜好品だと捉える特質は以下の7項目である。

・エネルギー源として期待しない
・病気への効果を期待しない
・生命維持に積極的な効果はない
・「ないと寂しい感じ」がする
・摂取すると「精神」に良い効果がもたらされる
・しばしば人と人とのコミュニケーション物・を円滑にする
・「植物素材」が使われることが多い

たばこに依存性があることは周知のことだろう。依存には精神依存性と身体依存性がある。前者はある薬物を摂取したいという欲求を強く抱くことであり、後者は繰り返し同じ薬物を摂取し続けることで体に禁断症状が出る状態のことを言う。たばこに含まれるニコチンには精神依存性が認められる（本島 2008）。

しかしながら嗜好品には中毒性や依存性のあるものが多い。代表的なものとしてたばこのほかに、酒や茶、コーヒーなどにもその作用があることは有名である。そうしたもののほか、一部地域で古くから嗜好的に摂取されているものにポリネシアのカヴァや、南アラビアや東アラビアのカート、東南アジアのビンロウなどがある。いずれも刺激性のある植物であり、加工を施して摂取する。カヴァは飲みものにし、カートやビンロウは噛むものである。軽い興奮作用、酩酊感、高揚感や鎮静作用など、どれもたばこや酒に似たような作用を持ち、精神へ作用している。刺激性の植物を恒常的に摂取していれば当然のように健康への影響も考えうる。それでも人はその魅力に酔いしれたのだろう。

たばこは、嗜好品として人間の生活にとってどのような役割があるのだろうか。人間は社会を形成することで現在まで生存してきた。本島氏によれば、嗜好品は一日の中のハレを演出する小道具の一つであり、「手軽な癒しの小道具」「手軽にリズムを変える小道具」として社会生活に溶け込んできたという（本島 2008）。確かに、身近な嗜好品であるたばこ・酒・茶もこれに当てはまりそうだ。休憩の「一服」や、「ちょっとお茶をする」といった時はそれまでの行動のリズムを変えるときであろう。また、帰宅後の「一杯」などは、それまで引き締めていた気持ちを緩めリラックスすることで

あり、気持ちや気分を切り替えるスイッチのような役割と言えそうである。さらに、嗜好品の特徴に「しばしば人と人とのコミュニケーション物・を円滑にする」という項目がある。誰かと「お茶をする」時や「一服」している時に会話が生まれたり弾んだりというのは、経験上理解できることである。これもコミュニケーションを促進する役割として数えてよさそうだ。

嗜好品は、お茶やコーヒー、たばこ、酒が広く知られている。そしてそれぞれ、カフェイン、ニコチン、アルコールという依存性の認められる物質が含まれている。カフェインの依存性は他に比べ弱いがニコチンとアルコールは高い依存性を持ち、誤った摂取の仕方で危険が伴うこともあるため、適切な判断力の元での嗜好が許される。だからこそ、たばこや酒が子供には許されず、大人のものであるというのも納得がいく。嗜好品は栄養摂取を目的としないが、コミュニケーションを促進させる作用と気持ちを切り替える作用を持つ。遊びと楽しみをはらんだ飲食物と言えるだろう。

2-3　たばこと人類の出会い

人類がたばこを用いるようになった年代は定かではないが、一説では8000年前とも言われる。たばこ属は南北アメリカ及びオーストラリアに多く自生しているが、南太平洋諸島とアフリカに各一種の固有種が見つかっている。そのうちの１種がアフリカのナミビアに自生している。8000年前の痕跡だとされるナミビアのダマラランド遺跡からは喫煙に用いたとする軟石で作った曲がった筒が出土していることから、こうした説が言われている。現在のブラジルでは紀元前1100年から200年代のものとみられる管状のパイプが出土している（川床 2007）。いずれにしても、未だたばこの葉が使われたという確証には至っていないが、たばこが喫煙されていた可能性を残すものである。

あまりにも有名なコロンブスの新大陸「発見」によって、その以前と以後ではたばこの歴史は大きく二分される。新大陸に上陸したヨーロッパ人の探検家や聖職者たちが残した記録が、アメリカ大陸で積み重ねられた先住民とたばこの関係を解き明かすのに、貴重な史料となっている。アメリカ大陸に栄えた古代文明には独自の文化が形成されており、たばこもそのうちのひとつである。そこでは、儀礼用として神に捧げられるものとして、たばこは存在している。

メキシコのパレンケ神殿に葉巻かパイプを吸う老神のレリーフがある。7世紀末に建設された神殿であることから、人とたばことの出会いは、7世紀からさらに遡ることになる。その頃のたばこは、人間が精霊と交信するための儀式の中の神聖な装置であり、例えば病因を探るために使われていたのだ。

アルゼンチンや、チリでもプレ・インカからインカ期にかけて、たばこはシャーマンのものであって、宗教的行事・魔除け・祈祷の際に用いられていた。普通の人はたばこではなく、コカを噛んでいたことから、たばこが他の植物と区別されていたと見える。しかし、神に対しての儀式の際にしかたばこを使わないアイマラ族もいれば、さほど重要視していないケチュア族など、民族によってたばこの重要度は異なる（和田 2004）。

コロンブスがアメリカへ上陸したことで、たばこはヨーロッパへ持ち帰られ、その後世界各地へ伝播していくことになる。各地で神聖なものとしての側面と薬効が従来の儀礼の中に浸透し受容されていく。ヨーロッパでたばこが受容された追い風になったのが16世紀の内科医ニコラス・モナルデスが当時正当な医学体系であった体液説にたばこを位置づけたことである。彼はたばこを万能薬と説き、多彩な薬効と空腹や渇きを癒す効果などを称えたことで、たばこの文化的組み込みに成功した。これをJ・グッドマンはたばこのヨーロッパ化と喝破している（鈴木 2015）。

そもそも人はなぜタバコを栽培してきたのか。タバコと他の植物との違いは何であるか。端的に言えば、それはニコチンの存在ということになるだろう。ニコチンは身体に生理的変化をもたらす、アルカロイド（植物塩基）である。喫煙以外でも嗅いだり噛んだりすることでニコチンは吸収されるが、それによる依存性こそが、様々な意味で人類を虜にしてきたのである。

＜世界にもたらされたたばこ＞

たばこと人間の出会いはどのようなものであっただろう。和田光弘氏による「たばこが語る世界史」という本から、たばこの記録を見ていく。まず和田はラス・カサスによる航海日誌を紹介している。「大海原で、男がただ一人乗る丸木舟と出会った。…乾燥した草の葉を2,3枚持っていた。この葉はすでにサン・サルバドール島で贈り物としてわたしに届けてきたことがあり、彼らの間では貴重品に違いないと考える」とある。コロンブス一行は到着直後に早くも先住民のたばこと接しており、さらに数週間後、先住民たちが香煙の出る草を持っていることに気づき、それについて「イン

ディアス史」により詳しい記述を残している。「いくつかの枯れ草を、一枚のやはり枯れた葉っぱに包んだもので…その筒の一方に火をつけ、反対側から息と一緒にその煙を吸い込むのである。この煙を吸うと…体の疲れを感じないという。…彼らはたばこと呼んでいる。」さらに「たばこを吸う癖のついたエスパーニャ人たちを見かけた。そのようなことをするのは悪癖であると私がなじると、もはや今ではそれを吸うのをやめることは、自分の手におえないのだ、と彼らは答えた。」たばこの依存性についての鋭い指摘が、すでにここに認められるのである。

一方、北米大陸ではパイプ喫煙（図１）が一般的であった。フランスの探検家ジャック・カルティエの航海記には、極寒の地カナダの先住民たちが、「石あるいは木で作った小さな角状の道具」で喫煙し、体を温めるようすが記されている。また、北米東部はとりわけパイプの使用が儀礼の場で重視されパイプの回し飲みなどによって約束事が公的に確認された。カルメット（平和のパイプ）として知られるこのような儀礼的なパイプ喫煙は、歌や踊り、物品の交換などを含む儀礼複合体の一部をなし、19世紀以降も先住民イメージを決定付けていた。

たばこはその効果が予測可能で、比較的短時間に消え、命の危険を伴うことがなく、効能のレパートリーも広かったため、種々の場面で用いられたのである。

一部地域でコカなどの他植物による代替の可能性がありえたものの、先住民たちはあらゆる方法でたばこを用いた。葉巻、パイプ、たばこチューブ、噛みたばこ、嗅ぎたばこ、さらには虫歯や傷口に汁を塗ったり、飲んだり、浣腸したりするなどである。幻視から医療、儀礼、社交に至るまで、アメリカ先住民にとってたばこは文化・社会の中に分かち難く埋め込まれていた。多様な使用法と多面的な意味・機能。たばこは決して単なる作物の一つではなかったのである（和田 2004）。

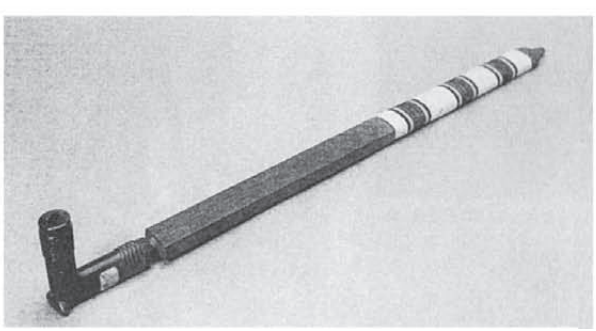

図１「インディアンのパイプ」北海道立北方民族博物館1996『たばこと民族文化』P30より

図２「嗅ぎたばこ入れ（上フランス・下イギリス）」北海道立北方民族博物館1996『たばこと民族文化』P19より

さて、異文化の植物であるたばこはどのようにしてヨーロッパへ受け入れられたのだろうか。象徴的な人物としてよく取り上げられるのはポルトガル駐在のフランス公使ジャン・ニコである。ニコチンの名の由来でもある彼は、1560年ごろ、たばこ薬効を確信して薬草園で栽培し、フランス宮廷へ献上しカトリーヌ・ド・メディシスの頭痛を嗅ぎたばこ（図２）で治したとされる。

こうして、社会の最上層の承認を得たたばこは底辺まで浸透してくこととなる。たばこの社会的承認に最も大きな影響を与えたのは、内科医のニコラス・モナルデスと言えるだろう。彼は1571年に出した薬草誌の中で、たばこを当時の正当な医学体系たるガレノスの体液説に位置付け、多彩な薬効と、空腹や渇きを癒す効果などとともに紹介したのである。たばこの医学的意味付け、文化的組み込みに成功した彼の著作はヨーロッパ各国語に翻訳され、およそ２世紀の間そのままの形で受け入れられたのである。

先住民にとってたばこへのアプローチは総体的なものであり、医薬としてのたばこの機能は様々な機能と切り離すことはできなかった。超自然現象をも含む世界観、宇宙観の中に組み込まれていたからである。しかしヨーロッパ人は医薬・万能薬としての側面にばかりもてはやした。この一種の特化現象をJ・グッドマンはたばこのヨーロッパ化と喝破した。ヨーロッパへのたばこの文化的組み込みが成功しなければ、地球規模での連鎖が始まることもなかったことから、たばこのヨーロッパ化は極めて重要な現象と言える。例えば、同じ「新大陸」の依存性植物でもコカはヨーロッパ化に失敗し、グローバル化することもなかった。

ただし、当初からたばこの普及に反対するものがいたことも忘れてはならない。早くから、たばこの習慣性が認識されたこともあり、体液説に依拠しながらも、たばこは体に悪いとの

図 3「トルコの水パイプ」北海道立北方民族博物館1996
『たばこと民族文化』P35より

主張や、痰壺の使用など、喫煙の見栄えの悪さを批判する者、異教徒の風習として非難する向きも多く、教皇庁は聖職者のたばこ使用を禁ずる令を何度も発している(和田 2004)。

＜世界に広がるたばこ＞

たばこはヨーロッパからさらにアジアへと伝わっていく。1575年頃、スペイン人がメキシコからフィリピンへ持ち込んだのが最初とされる。しかしすでに、東南アジア、南アジアではベテル・チューイングと呼ばれる独自の嗜好品文化が定着していた。16世紀末にはモルッカ諸島で葉たばこの栽培が行われていたり、17世紀にはジャワでもパイプ喫煙が嗜まれるようになったりしていった。パイプ喫煙や葉巻はそれぞれの地で自文化を補完しつつ、従来の様々な儀礼の中に浸透した。

日本へたばこが伝えられたのは、伝播ルートについても年代についても諸説あり詳しいことはわかっていないが1600年前後だと考えられている。中国へも同時期、明代晩期に持ち込まれたとされている。喫煙の広がりを嫌った明最後の皇帝、崇禎帝は禁令を出したが、効果はなかった。それどころか、たばこの薬効が説かれたことが文化的受容の追い風となって普及し、清代には男女問わず喫煙が広まったとされる。ただし、たばこ生産の拡大は、食糧生産を圧迫する恐れがあったことから康熙帝や雍正帝は禁令を発した。だが、両帝とも鼻煙(嗅ぎたばこ)を好み、芸術的な鼻煙壺(図３)の収集・製造に執着したため、その使用は庶民にも広まることとなった。

イスラム世界へも、初めは医薬としてたばこは導入された。17世紀初頭にトルコへもたらされたとされるが、喫煙はコーランの教えに反するとの見解も強く、また火災の危険性もあってオスマン朝のスルタン、アメフト1世やムラト4世は禁令を出し、残酷な刑罰を科した。同時期にたばこが持ち込まれたペルシア(イラン)でも、サファヴィー朝のアッバース1世、サフィー1世など断続的に喫煙者の処刑を行っている。しかしながら、たばこの依存性は冷酷な弾圧をも凌駕し、これらの地域に広く普及するに至る。とりわけトルコはオリエント種の一大生産地として名を馳せるようになる。また、フッカーなどと呼ばれる水パイプ(図４)もイスラム世界で発明されるが、その構造上、携帯に向かないため、喫煙手段はコーヒー片手に、皆で一緒にたばこを嗜むという社会的機能を担った。水ギセルは17世紀末までに中国へも伝わり、小型で金属製の水烟袋や、竹製の水烟筒が派生した。

アフリカのマダガスカル島でも1630年に水ギセルの使用が報告されている。東アフリカへはポルトガル人や、アラブ商人などが、マグリブなどアフリカ北西地域へはイギリス人、フランス人がそれぞれたばこを伝えたとされる。早くも16世紀末から栽培が始まり、1630年代には西アフリカでも浸透したとされる(和田 2004)。

大航海時代以降、マヤで生まれたたばこ文化は世界中へ伝播し、それぞれの地域で自らの文化に取り込んでいった。そして独自のたばこ文化を芽吹かせる。例えばヨーロッパではクレーパイプ、メアシャムパイプ(図４)、ブライヤーパイプなどパイプと名のつくものでもありとあらゆる形状のものが生み出された。トルコや中近東では水パイプが発明され、日本や東アジアの国ではキセルが流行する。粉状のたばこを鼻から吸う嗅ぎたばこは18世紀フランスで大流行し、中国でも鼻煙壺となって普及した。ガムのように口のなかで噛む噛みたばこはシガレットほど世界中に広まることはなかったもののアメリカ大陸では古くから楽しまれている。

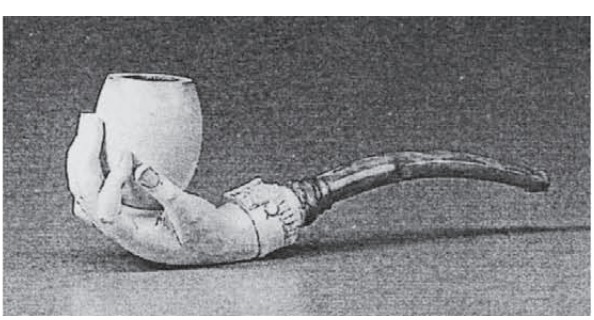

図４「メアシャムパイプ」北海道立北方民族博物館1996
『たばこと民族文化』P35より

3.日本のたばこ

3-1日本のたばこの歴史

江戸時代の喫煙

日本へのたばこの伝来は、様々なたばこ史研究によって史料に多くの文献が紹介され考証されているが、未だ明確なことはわかっていない。日本のたばこの歴史に関して、情報元がわかりやすくまとめられているのが長谷正視氏による1993年の『日本・たばこの歴史』である。それによれば、伝来時期は主に、天文年間、天正年間、慶長年間とおおよそ3つの説に分かれているという。天文年間説では1543年にポルトガル人が種子島に鉄砲とともにたばこも伝来したとする説である。天正年間（1573－1591）説は、キリシタンとともにたばこが伝えられ、長崎に植えられたとするものである。キリスト教の渡来は天文18（1549）年にザビエルによるものが最初とされているが、天正年間に増加した宣教師によって持ち込まれたとする説である。最後の慶長年間（1596－1614）説は最多の説である。しかし鈴木氏によれば「現状では、根拠に欠ける伝聞記述でしかない慶長10（1605）年説を中心とする慶長年間伝来説が半ば定説化している」（鈴木2015）と疑問を投げかけている。

このように説が様々言われているのは、日本に伝わったことを記した史料でのたばこという意味が、喫煙用のたばこであるか、植物のたばこ（あるいはその種子）の伝来なのか混同していることが、古くアーネスト・M・サトウの論文でも指摘されている（宇賀田 1973）。

日本にたばこが伝来した当初は、たばこは輸入品であり、入手できるのは上流階級や裕福な層のものだったと推察される。たばこが国内に広まるには、葉たばこの国内栽培が始まる必要がある。

長谷氏によると、確実な文献に基づくと慶長7（1602）年京都東山初植え説を、葉たばこ国内栽培の始まりだと推測している。しかしこれが本当の唯一の初植えかどうかは疑わしい。葉たばこの国内栽培が始まった年代、定着した年代については憶測の域を出ないが、ここで重要なことはたばこが国内で栽培されるようになって初めてたばこが庶民のものとして根付いたことである（長谷 1993）。日本でたばこ喫煙が受け入れられ、のちに文化として花開く歴史はここから動き出すと言っても過言ではない。

ある程度庶民に喫煙が広まると、早くからたばこの禁令が出される。最初の禁令は豊太閤の時代1590年前後であると古くから言われていた。その根拠とされるのが文政13（1830）年の『喜遊笑覧』という百科全書にある「太閤の時の落書に（略）きかぬものたばこ法度に銭はっと王のみこゑにけんたくのいしや」という記述である。たばこ研究の中ではよく登場する説である。しかしこの説は、禁令が出たとされる年の240年後の書物であることや、国内での初植えと考えられる慶長7年以前の禁令であることから、その時代に禁令が出されるほど一般に普及していたかは甚だ疑わしい。確実な根拠もないため、信用はおけない。

慶長10年以降、12年、13年、14年と立て続けに禁令が出されていることから、この慶長10年前後にはたばこがそれなりに普及していたと考えられる。当時、京都にはかぶき者と呼ばれる悪戯者が溢れており、主に「荊組」「皮袴組」というように徒党を組んでいた。そうした輩の結びつきを強めたのがたばこであった。「たばこヨリ組ニナリ」とあることからたばこがかぶき者のステータスやシンボルとなっていた。初期のたばこへの禁令は主にこのかぶき者対策として表れてくる（長谷 1993:12-15）。

慶長17（1612）年、慶長20（1615）年に出された禁令では、それまで喫煙禁止にとどまっていたのが、たばこの栽培・売買にまで広がり、罰則も明確に規定されるようになる。それはかぶき者弾圧がよりきめ細かく具体的になったことを示す。

度重なる弾圧によってかぶき者は次第に姿を消していくと、喫煙禁止の禁令も無くなっていった。しかしたばこはかぶき者だけが吸ったのではなく、一般の庶民も吸っていた。このころのたばこに関する禁令はかぶき者対策の一環として行われた目的が大きいとみられることから、かぶき者以外の庶民の喫煙はそこまで厳しいものではなかったと推察される。

ともあれ、元和2（1616）年から、4年、5年、7年、8年と立て続けに栽培・販売の禁止令が出ていることから、すでに庶民の中で喫煙習慣が定着し、見過ごせないくらいにたばこの消費が拡大していたと思われる。この時の内容はたばこの栽培と売買の禁止である。さらに寛永19（1642）年、翌20年には、本田畑への栽培を禁止する令が出されている。消費が大きくなったのは生産が大きくなったことの裏返しであろう。たばこの売買が一般化し、たばこ栽培が本田畑にまで広がったことを示している。寛永19年からは喫煙・栽培・売買自体は禁止されず、本田畑への栽培禁止のみとなっている。生産幕藩経済体制の基礎である米年貢徴収に影響が出ることを恐れた禁令である（長谷 1993:18-21）。

日本にたばこがいつ入ってきたのかについては、はっきりと年代を特定することはできない。慶長10年以降確認できる禁令が増えることを考えると、このころにはある程度たばこが日本で使用されていることは言えるだろう。また、かぶき者のシンボルにされていたところから、珍しいものではあったにしても庶民が入手できる環境にあったと思われる。その後時代が進むにつれ、喫煙の禁止が消え、栽培・売買の禁止になり、さらには本田畑の栽培の禁止のみと緩和されていった。

注目したいのは、かぶき者がたばこをシンボル的に使っていたという点である。かぶき者たちはこの時代ですでに、意図せずたばこのコミュニケーションの作用を利用していたと考えられないだろうか。現代では、喫煙者同士仲が良くなるのはどこでもよく見かけるし、当然のこととして考えられる。この時代でも一緒に喫煙をするもの同士の結びつきが強くなる、いわゆるたばこミュニケーションが行われていたのではないだろうか。

＜未成年喫煙の禁止＞

たばこの国内栽培が始まって以降、喫煙習慣は確実に定着し急速に普及した。日本の喫煙習慣には２つの特徴がある。未成年喫煙と女性喫煙の抑制である。

喫煙が大衆の間に普及されると同時に、目上の人や年上の人の前では喫煙を遠慮するのが普通であり、礼儀であったとされている。大人、すなわち一人前になって社会的に認められるようになるまで目上の人、年上の人の前ではたばこ入れすら隠すというルールがあった。この社会的規則を支えていたのは、江戸時代全国の農村に根付いていた若者組の存在であった。この若者組に加入すれば１人前と認められ、神事への参加・結婚・酒・たばこ・服装など、子供には認められない権利が許されるようになった。１人前になれば、義務も発生する。火災や盗難の予防、村落の整備、水害の除去、外来人や風紀の取り締まりなど、村落の治安維持に関することは若者組の義務であった。一人前になるためには一定の年齢に達し、若者組への加入が条件になるが、一人前にふさわしい労働能力を持っていることも求められていた。

一人前になって子供から大人になった時、初めてたばこを吸うことが許された。一人前でないものは喫煙できないというルールの根底には、喫煙は大人の習慣という社会的通念があったのだ。

明治維新といえば、それまでの幕藩制が崩壊し政治体制及び社会体制そのものが大きく変化したことであるが、江戸から明治への変化は喫煙をする層へも影響を与えた。時代が明治になると、それまでの身分制度が崩れることで職業選択が自由になり、明治5(1872)年には学制が制定された。教育制度の整備は若者層から学生が出現することを意味する。これはそれまでの、一人前になるまでたばこは吸えないという社会的ルールから外れることでもあった。明治22年『女学雑誌』記者が各府県の学校校長に質問を寄せ、密かに学校生徒の喫煙状況を問い合わせた調査によれば、12歳以上の少年の喫煙者率は3分の1以上で、学校でも禁止することなく、喫煙場所の制限に過ぎなかったとされている。驚くべきことに喫煙ルールの乱れは中学・高校だけではなく、小学校にも及んでいた。

若者組のような社会ルールを支える基盤は弱体化し、新たな社会制度の元で生まれた学生によって一人前になるまでたばこは吸えないというルールはもはや意味を成さなくなった。一方で徴兵制の義務付けから一人前とされる年齢は20歳だと社会一般がだんだんと観念するようになっていた。一人前と認められる年齢は上昇しているのに、より若く一人前の働きもない学生・生徒・児童までもが喫煙することは世の大人にとって我慢ならないことであった。この矛盾の解決するものとして明治33(1900)年に出されたのが未成年喫煙禁止法であった(長谷 1993:23-30)。

＜女性の喫煙＞

たばこは国内で栽培され一般に普及するまで、輸入品として高価であり、限られた上流階級の人しか入手出来なかった。したがって、女性で初めて喫煙を体験したのも上流階級の女性であるだろう。

江戸時代の女性の喫煙に関する史料や実態がわかる史料はあまり見つかっておらず、わかっていないことが多い。享保2(1717)年「世間娘気質」に「むかしハ、女のたばこのむ事、遊女の外ハ怪我にもなき事なるに、今たばこのまぬ女と、精進する出家は稀なり」と記述があることから当時の女性にもたばこが日常的なものとして広まっていたことが推測できる。さらに宝暦2(1752)年本居宣長は「女はおほかた、すかざらんがまさりてぞ見ゆる。(略)されど、今はおしなべての事になりぬれば、もちひざるは中中さうざうし」と述べており、批判的な態度は見えるが女性喫煙の普及に驚いている。

江戸時代、社会的習慣として定着した女性喫煙は、明治半ばまではそのまま変わらず続いていた。『女学雑誌』の記事

によると明治26(1893)年上流婦人の園遊会の時、「数十本の長烟管を備えた」「婦人の吸烟室」を設けて、大変喜ばれたことが報じられている。さらに「西洋にては表向き婦人は吸煙せざる者と定まり居れば(略)平生煙草を呑むこと叶はずして非常の苦を感ずること、多し、国異なれば習慣同じからざるは当然のこと」と続き、女性の喫煙が当然のこととして認識され、異端視されることはなかった。しかし女性の喫煙は明治40(1907)年前後を境にして急激に減少していく。大正、昭和と時代が進むにつれて、女性の喫煙は好ましくないとされ、若い人から減少していった。

女性の喫煙が問題視される象徴的な事件が昭和7(1932)年の女性たばこ「ウララ」の発売反対陳情である。矯風会・東京婦人連合・救世軍・日本女子大校長らが専売局長官に「ウララ」発売反対の陳情書を提出したのだ。当の女性自身が「父として夫としてその妻の喫煙を喜ぶ人がありませうか」「婦人のたしなみ、良風美欲を破壊する」とまで言い、「精神上、教育上が及ぼす害や甚大」と述べている。明治30年代から昭和7年までの30年の間で女性の喫煙を取り巻く状況のこれほどまでの変化が起きている。それは喫煙だけの問題にとどまらず、女性の地位、社会的評価をめぐる一大変化によるものであった。

江戸時代の喫煙は一人前になることで許された。かつては女性の喫煙が問題視されていなかったことを考えると、それは男性だけに限らず女性も同じだったと思われる。女性も一人前と認められるには、一定の年齢と一人前と認められるだけの仕事を覚える必要があった。

農家であれば、農作業や村民との交際などの家庭外の仕事は男の仕事、家事に代表される家庭内の仕事は女の仕事とはっきり分かれていた。家長である男はこの二つを上手に統括することであり、家事については主婦に完全に任せ、主婦の権限を男である家長が侵害することは許されなかった。夫に何かあった時には主婦は一家を代表するものとして、夫に代わり家庭外の仕事もきちんとやり遂げなければならなかった。それだからこそ夫の完全なパートナーとして社会的に認められる存在であった。一人前の社会的公認、それが同時に一人前であることとして喫煙の公認に繋がることになった。

明治29(1896)年に明治民法が定められたことによって、それまで庶民の女性に認められていた能力も権利も全く否定してしまった。第一に妻は無能力者とされ、妻が職業を営んで自分の財産を処分する時、借金をする時には、夫の許可が必要になった。第二に妻の財産、持参金、不動産の処分やそこからの収益を妻の所得とすることもできなくなった。第三に、妾が公認され、妻の姦通は離婚の理由や犯罪になるが、夫の不貞は離婚の原因にすらならなくなった。第四に妻は相続権を失った。家督は原則として男の子が相続することとなった。それまで認められていた庶民の女性の一人前の権利や能力は否定され、夫のパートナーとしての地位は失われ、社会的に女性の非一人前化を計ったのが明治民法だったのだ。

明治になり資本主義の発達につれて職業と家庭が分離し、家業を離れた労働が生まれると、労働は賃金として評価されるようになった。女性の家事を主体とする労働は、無償の労働であるがゆえに段々評価されなくなっていく。それは女性を一人前として評価せず、金銭的労働に従事する男性の従属的存在とする見方を強めた。先に述べたが、明治33年に未成年者喫煙禁止法が施行される。これは社会的通念としては一人前ではないものの喫煙を法で禁止したものであり、社会通念上、一人前でないものは「女・子供」になったのだ(長谷 1993:31-43)。

江戸時代から女性の喫煙は特に問題視されず、一人前であるなら当たり前のこととして認識されていたと思われる。明治初期まで一人前である女性の喫煙のイメージは悪いものではなかった。しかし、明治民法の施行に伴い女性が男性の従属的立場とみなされるようになると、女性の喫煙は許されなくなっていった。時代が進むにつれ、その勢いは加速し、女性のたばこは風紀の乱れと言わんばかりに悪いイメージが付与されていった。昭和に入ると、女性自らが女性向けたばこの販売反対を主張するようになる。

JT(日本たばこ産業株式会社)が昭和40(1965)年から毎年行っている「全国たばこ喫煙者率調査」によると、昭和40年から平成28年現在まで女性の全年齢平均喫煙率は20%を超えたことがない。日本の喫煙率は男女共に昭和41年にピークを迎えている。同年の男性の全年齢平均喫煙率は84%と高い水準にもかかわらず、女性の場合は18%である。その後若干の上下を生じつつも2016年現在の9.7%まで下降してきている。流行や社会状況などで20代30代の若年女性層の喫煙率が21%を超えた時期もあるが、依然として喫煙率は低いと言っていいだろう。女性の喫煙率が戦後もずっと低いことの背景に過去の明治後半期から始まるイメージの付与を感じずにはいられない。

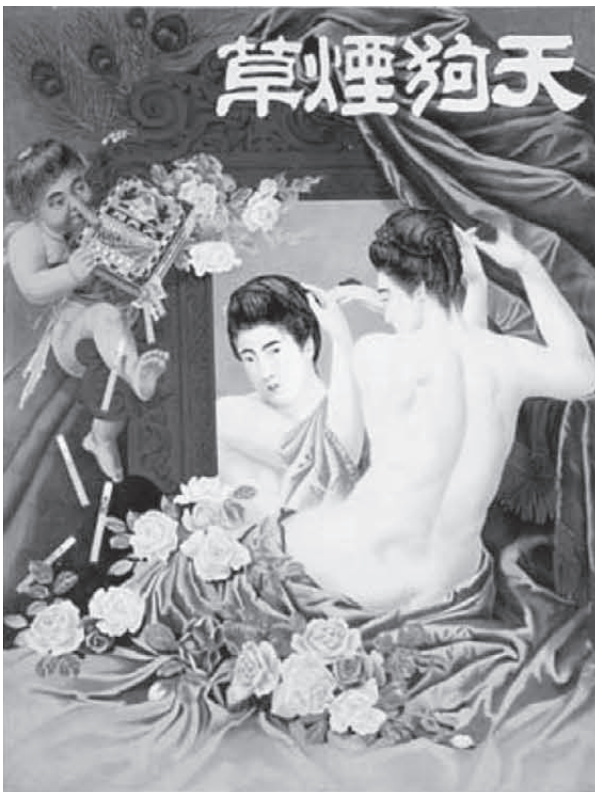

図５「天狗煙草」①　明治33(1900)年 P15より

図６「忠勇」②　明治33(1900)年 P24より

3-2ポスターから見るたばこ

明治以降、紙巻きたばこ、つまりシガレットが世に広まると各社がたばこの売り上げを良くするために宣伝ポスターを作成した。ポスターはそれ自体がデザイン性に富みきれいであるが、その時代を映し出す鏡となるものである。そこでたばこに関するポスターを見ていくことで、たばこのイメージや、使われ方、時代背景を探っていく。

資料としてはたばこと塩の博物館所蔵のポスター資料を扱うこととする。たばこと塩の博物館が館所有の図録にし、昭和62(1987)年に発刊したものが『ポスター1』である。これには、明治期から昭和初期にかけて実際に使用されていた457点のたばこや塩のポスターとそれに関連する印刷物の資料が収録されている。本稿ではこの本に収録されているたばこに関するポスターを見ていく。

図５は「天狗煙草」であり、岩谷商会が売り出していたたばこである。日本人の女性が裸で鏡の前で髪をとかしている姿が画かれている。西洋絵画を模したものであり、天狗たばこの名の下、天使と天狗をかけているようだ。

一方、岩谷商会とは国産葉を用いた口付 たばこで有名である。「○○天狗」といった名称を用い、ブランド展開を図った。

図６は村井兄第商会商会が売り出していた銘柄の「忠勇」というたばこである。口ひげを生やした軍人が堂々とした態度でたばこを吸っている。画面中心には軍旗の上に乗る鷹の描写があり力強い印象を受ける。

村井兄弟商会とはアメリカからの輸入葉を使ったたばこで市場を拡大したたばこ会社である。国内だけでなく、中国・朝鮮を含めた市場展開をしていく。代表的な銘柄に「サンライス」「ピーコック」「リーダー」などがある。

両者とも商品の販売における広告宣伝の役割を早くから認識し、様々な方法で商品をPRした。「天狗の岩谷とハイカラの村井」と呼ばれ、その宣伝合戦はその後の広告技術の発展に影響を与えた(半田 1987)。

たばこの売り上げを日清戦争後の財源にするため、明治31(1898)年に薬煙草専売法(国家が葉たばこを買い上げ、専売制にする法)が施行された(川床 2007)。このころは現在のような完全な専売ではない。民営たばこ隆盛の時代であった。

図７「国に国防　社交にタバコ」④
昭和12(1937)年 P56より

図７では、海軍の制服を着た男性二人が向かい合ってたばこを吸っている。背景には軍艦と艦載機とみられるシルエットが配置されている。これは当時の大蔵省専売局によって制作されている。明治37（1904）年に煙草専売法（国家がたばこの製造・販売を管理する法律）が施行され、たばこは国家に管理されることとなった。たばこは税収、国債発行と並んで、日露戦争の戦費調達の手段となるとともに、財政収入の大きな柱となっていた（川床 2007）。

図８の「たばこは動くアクセサリー」とは今も販売されている「Peace」の女性向けキャッチコピーである。美人がアイコンになり、「美しく喫煙する」様子が描かれている。

図 8「たばこは動くアクセサリー」P79より

昭和30（1955）年からたばこは日本専売公社のものとなり、こうしたポスターの制作も全て行っている。日本たばこ産業株式会社（JT）の前身である。

4．現代社会と喫煙

4-1　喫煙者を取り巻く社会現状

厚生労働省がHP上には、JTが昭和40（1965）年から毎年行っている「全国たばこ喫煙者率調査」の結果が掲載されている。男女別年代別に喫煙の有無を調べたものである。それによると2016年の日本の成人喫煙率の男性の全年齢平均は29.7％であり、同じく女性では9.7％となっている。男性の29.7％という数字は、統計を始めた昭和40年以降で初めて30％を下回ったこととして新聞各社に報じられている（日本経済新聞2016/7/28）。

データにも表れている通り、喫煙者人口は右肩下がりである。今日では喫煙者はマイノリティへと変化している。こうした背景には、医療機関の取り組みのほか、保健に関する国際情勢や政治的取り組みが大きく関与している。

WHOでは1970年から各国に対して喫煙に対する注意喚起を行っており、1988年には「世界禁煙デー」も設けられた。日本での喫煙による健康への悪影響は1987年に厚生省の公衆衛生審議会で作成された「喫煙と健康問題に関する報告書（たばこ白書）」によって明らかにされている。JR、航空機、バスなどの各種交通機関では1980年頃から喫煙者対策がじわりと始まっている。JRでは1980年に起きた列車内の禁煙化を求める嫌煙権訴訟を皮切りに禁煙車両設置が進むようになり、航空機でもバスでも、同じく1980年頃から喫煙席の減少や禁煙席の増加が進んだ。とはいうものの、この頃の日本政府はたばこの有害性の認識がまだまだ甘く、これといった対策も行っていないに等しい。

たばこに対する対策が活発化するのは2000年代に突入してからになる。2002年の「健康日本21」において、「たばこの健康への影響に関する情報の提供」、「未成年者の喫煙防止」、「受動喫煙の排除・減少させるための環境づくり」「禁煙希望者に対する禁煙支援」などの目標が設定されたことで、公共機関での分煙やたばこ広告の規制などのたばこ対策が次々に行われ始める。同年10月には千代田区で区内の40パーセントを「路上禁煙地区」へ指定した。2003年にはたばこ事業法改正でパッケージへの具体的な健康への危険性を示すことが義務付けられた。同2003年にWHO の総会で喫

煙による健康被害の防止を目指して「たばこ規制枠組条約」（FCTC）が採択されている。日本がそれを批准したのは2004年のことだ。2007年には、FCTC第二回会議で「たばこの煙にさらされることからの保護のガイドライン」が作られ、2008年には、WHOはFCTCの支援のためにたばこの使用と、たばこによる死亡を減らすことが立証された６分野の包括的たばこ対策による報告書"MPOWER"を作成している。各国及び日本もこれらに沿ってたばこ政策が行なわれていると言っていいだろう。

各地域、自治体で着々とたばこ喫煙防止政策が進められてきた現在、また一つ大きな出来事が起ころうとしている。今年2016年8月31日「たばこ白書」が15年ぶりに改訂された。「たばこ白書」は厚生労働省による喫煙の健康影響に関する報告である。この中で喫煙者本人の影響では、肺がんなどのがん以外にも、腹部大動脈瘤や歯周病などで確実に関係するとした。妊婦の喫煙は早産や胎児の発育遅延などにも確実に影響を与えていると報告した。また、日本の受動喫煙対策の遅れも指摘した。日本は健康増進法に受動喫煙対策の努力規定があるだけで、「屋内の100％禁煙化を目指すべきだ」と提言している。これに伴って、自民党の受動喫煙防止議員連盟会長から「たばこ1箱1000円」提案がなされるなど、今後も際立った変化が起こりそうである。

＜社会が関与する「健康」と解決できない「迷惑感情」＞

今日のたばこを取り巻く様々な問題は、吸う人自身の体への影響はもちろんのこと、他人の健康も害するという点から始まっている。つまり、健康への意識と迷惑の感情この二つがキーワードとなる。

健康とは身体的にも精神的にも健全であることを言うが、健全な状態とは極めて個人的で幅があり、加齢や環境によって変化するものである。しかし、身体的健康のみに目を向け、個人差を考えずに標準値のみで判断しているのが今日の"健康"という概念ではないだろうか。WHOの健康の定義は「身体的、精神的、社会的に良好であること」とされているが、これはつまり身体と精神の良好という個人の状態は社会的基準によって決められるようになっていることにほかならない。

本島氏によれば、社会的基準によって規制される"健康"は個々人に自分自身の健康基準を捨てさせ、社会的な健康基準に同調するように迫る「健康への脅迫」となっている。現代健康観の特徴として、「異常なものの排除」もあげられる。「良好な状態」という抽象的な表現を「異常のない状態」に置き換えているが、"異常"の判断は制度的に権威づけられた医師の恣意によるため、消去すべき異常が細分化し、無限連鎖の世界に入り込んでいる。健康とはあくまでも手段であり個人的なものであって、しかも加齢や環境によって変化するものであるから、個々人の自立・自律を基本に考えて社会の関与は最小限にとどめることが必要ではないかと疑問を投げかける。

さらに本島氏は、「たばこが迷惑だ」という声の背景には、迷惑鈍感と迷惑過敏がもたらした社会構造、その中で増加した大人になれない大人の問題があるとし、2002年の東京都千代田区「歩行喫煙禁止条例」を迷惑鈍感と迷惑過敏に対応する措置の例としてあげている。迷惑過敏とは少しの迷惑も許せないことで、迷惑鈍感とは人が迷惑に感じていることを察知できないことだという。社会生活は個人一人ひとりの意思によって成り立っており、個人一人ひとりの「良心の掟」がない限り、いくら法や制度を改めても犯罪や迷惑行為は無くならない。強制力を持つ法や条例はこれに違反すると社会秩序が保てないという場合にのみ支持されるべきだと批判的な立場を示している（本島 2008）。

対して、田中氏は自身の論文で「他人に迷惑をかけているという自覚もない喫煙者のモラルに訴えたところで世の中は変わらない。明確な「ルール」が必要であり、行政的規制（喫煙規制）の強化が必要不可欠」であると述べている（田中 2008）。「迷惑感情」を解決するための考えはこのように議論されている。

人々は、他人によって健康が害されるかもしれないことへ過敏になっている。それは、自分の身の健康がもはや個人のものでないことが根底にあると考えられる。

4-2　喫煙に関する聞き取り調査

現代社会に生きる人々はたばこに対してどのような気持ちを抱いているのだろうか。自分の身近な友人たちにインタビューをした。インフォーマントには、はじめに喫煙をするかしないか、及びにたばこに対して否定的かどうかを聞き、それぞれの意見を聞いてみた。たばこへの立場は便宜上、否定派と肯定派と記述している。ここでは22歳前後の男女7人の意見をまとめている。主に聞いたことは、①喫煙への良し悪しの気持ちとそのきっかけと理由、加えて変化について、②子供の頃の家族や周りの大人の喫煙状況、③健康への害への気持ち、④パートナー選びに喫煙が関係するか

イニシャル	W	M	N	S	Y	T	K
性別	男	女	女	女	女	男	男
年齢	22	22	23	22	22	22	21
喫煙	×	×	○	○	×	○	○
嫌悪	○	×	○	×	○	○	×

表1 インフォーマントの情報

どうか、⑤たばこを吸うビジュアルをどう思うか、⑥たばこに関することで何か感じることがあるかどうか、この6つである。対話を通して、その都度気になったワードや掘り下げたいことがあれば質問した。

表1は、インフォーマントの情報をわかりやすくまとめたものである。喫煙の有無と嫌悪の有無を○×で示した。喫煙をしない場合×でする場合は○である。嫌悪を抱く場合○でそうでない場合×と示している。

以下はインタビューで聞いたこととその考察をまとめたものである。

① Wさん22歳・男性　非喫煙・否定派

Wさんはたばこのにおいが嫌いだという。両親や家族など近しい人でたばこを吸っている人はいなかった。小学生の頃の保健体育の教科書に載っていた、喫煙者の肺と非喫煙者の肺の汚れを比較した写真を見て、たばこは絶対に体に悪い物である、という気持ちが芽生えた。それからは、たばこが100パーセント悪い物だとして捉えてきたという。気持ちの変化があったのは、自身の尊敬する人や、周りの友達がたばこを吸うようになってからだった。たばこによってストレスを発散させている様を身近に感じることで、たばこ自体が一概に悪いとは言えないという気持ちになったと彼は言う。喫煙者の中でも、たばこを吸っているからこその配慮が見えると好感が持てる。自分のようなにおいに過敏になってしまう人やたばこが嫌いな人に対して、見えないところで吸うだとか、たばこのにおいを消そうとしている人とかだ。逆に、自分に煙がかかったり、たばこのにおいを撒き散らしたりしているような人には不快感を感じるという。自分の友人がたばこを吸うことに関しては、悩みやストレスを感じているのではないかと心配になるとも言っていた。

以前はたばこを吸う人自体が嫌いだったが、今ではたばこはただの要素の一つであって、マナーや人柄が見えかくれするものだと思うと語る。

彼との対話の中で、値上げや規制だけで喫煙者を減らそうとしている点と、ストレスや精神に寄り添わない社会の形が見えてきた。「ストレスを抱えているからたばこを吸うのに、そのストレスをより重くするようなやり方に思える。精神面に寄り添うような対策が取れたら、吸う人の本数も減るのではないか」と述べた。たばこを値上げすることで喫煙者が少なくなってもしっかりと税収入を見込んでいる政府の思惑を暴くような鋭い指摘である。

② Mさん22歳・女性　非喫煙・肯定派

Mさんの身の回りの大人もたばこを吸わない人が多かった。そのせいか子供の頃から、漠然と「大人が吸うもの」という気持ちしかなかった。中学～高校にかけて、ファッションアイテムの一部としての認識になっていったという。今ではそれよりも、ストレス解消のアイテムとしての認識が強い。また、飲み会の席などでは、喫煙者は灰皿のあるところに集まり、たばこによって見えない壁のようなものが生まれているという。喫煙は人と人を分かつ行為であると述べた。

たばこ自体への嫌悪はさほどでもないにしても、白いものが黄ばむことや服ににおいがつくことには嫌だと感じていた。

様々な理由で人の健康は害されると述べ、たばこ単体の健康への害について気にしている様子はなかった。

③ Nさん23歳・女性　喫煙経験あり・否定派

Nさんの父や祖母が喫煙者であったことから、もともと喫煙は身近に感じていたが、10代後半にたばこが急激に嫌いになったきっかけがあった。その当時付き合っていた恋人が喫煙し始めたことがたまらなく嫌だった。副流煙によって害を被るし、何よりも自分ににおいがつくことへの嫌悪を認識したそうだ。そんな彼女が喫煙を始めたのは20歳の頃で、きっかけはコンビニのアルバイトでのストレスだった。あれほど嫌悪していたのに、そのアルバイトを辞めるまで1日1～2本吸うくらいの喫煙者になっていた。喫煙をすることで、気持ちを落ち着かせることができたという。とはいえ、アルバイトのストレスがなくなってからは吸う必要がなくなり、自分に付着するにおいへの嫌悪から自然と吸わなくなった。現在では、飲酒の席で人から1本もらうくらいでしか吸わないという。

彼女の喫煙への嫌悪の気持ちは、それまで関わってきた

たばこを吸う人のイメージがたばこへ付随していた。当時の恋人の嫌な思い出とたばこそのものが持つ体への害やにおいなど嫌悪を感じる要素が一つの悪の塊になっていた。

今では、喫煙自体に以前のような嫌悪や関心はないが、喫煙行為へは「格好悪い」「ださい」という気持ちは依然として変わらないという。喫煙していた頃も、その気持ちはあったためたばこを吸う自分の姿を人に見られることには抵抗があった。喫煙している自分は悪いことをしてるような後ろめたさ、恥ずかしいことをしている気持ちがあった。

さらにNさんはたばこを吸う人とたばこが嫌いな人を「接触させない」ことが一番いいのではないかという意見を述べた。嫌いな人にとっては「見る」ということだけでも嫌悪を引き起こすから、「喫煙者が安心して吸える」「見せない喫煙所」が増えるといいのではないかと述べた。

かつて喫煙していた彼女はたばこの持つ特性をよく知っていた。ブレイクタイムを強制的に作る側面や喫煙者同士のつながりを深める側面についてである。あえてメリットという言葉をここで使うが、そうしたたばこの持つメリットを実感し理解しながらもなおたばこに嫌悪を抱いている。

④　Sさん22歳・女性　喫煙・肯定派

幼い頃からたばこのにおいに嫌悪感はなく、むしろ気に入っていたという。たばこが体に悪いものだという意識が芽生えたのは、子供の前でたばこを吸う大人に対して母が怒りを示したことがきっかけだった。初めてたばこを吸ったのは高校2年生の頃。母と進路についてもめた際、どうにか怒りを鎮めたい気持ちで当時大学生だった兄が吸っていたたばこに火をつけた。反抗心の表れだった。吸い方がよくわからなかったことや、入手ができないことからその後吸うことはなかった。喫煙者になったのは大学2年生の時だ。友人に吸い方を教わり、たばこを吸った時のクラクラした感覚に酔いしれた。それから喫煙行為自体が快楽になったという。今では1日に3〜4本を吸う。

彼女がアルコールではなくたばこに気持ちが向いたのは、自身の専攻である絵画の制作に影響しない点だったと述べる。酒を飲みながらでは細かい作業ができない。たばこだと気持ちの切り替えができるし、休憩の時間を適度に設けることができて、自身に合っていると感じていた。

Sさんがたばこを吸う大きな理由はもう一つある。彼女が身を置くアート業界はコネクションのつながりがキーとなる。そこでしばしばコネクションを作る道具として使用されるのがたばこである。作品を売買するアートフェスの喫煙所では大手ギャラリストと繋がることのできる可能性があり、大きな取引が生まれることもあるという。たばこを通してアーティスト同士のコミュニケーションが弾むことを肌で実感してからは、現在たばこをやめる気にはなれないと語った。しかし、喫煙にはタイムリミットを設けているという。20代は“今”したいこと、生きたいように生きると決めていて、健康のことも“今は”気にしないでいるという。だからたばこをやめるのも、健康のことを考えるのも30代になってからの予定だ。

昨今のメディアでは「結婚相手にしたくない人ランキング」などとしてワーストにランクインする“喫煙者”である。それとは反対に、Sさん自身もたばこを吸う身として、喫煙経験のない男性は相手として考えられないかもしれないと述べた。彼女にとって喫煙という行為が自分を形どる大きな要素になっているようだった。

⑤　Yさん22歳・女性　非喫煙・否定派

Yさんはたばこが嫌いと周りにも公言している。理由は主に2つ挙げられる。一つは気管の弱さから煙を吸うと咳き込んだり、苦しくなったりすること。もう一つはヘビースモーカーだった祖父が、たばこが原因と思われる病気で苦しんでいるさまを見てきたことだ。小学校高学年から中学生にかけて目の当たりにしたたばこの健康への害によって、たばこだけでなく、吸っている人も包括して嫌悪を抱くようになったそうだ。22歳になった現在は、禁煙を押し付けてしまったらその人のストレスの逃げ場を奪うことになるのではないかと考えから、吸いたいのであればその気持ちを無理に抑える必要はないと感じるという。

また、自身のパートナーを選ぶと想定して、喫煙はどのように作用するか聞いてみた。例えば、好意を寄せるだけであれば、喫煙が判断基準にはならないという。「はじめこそ先入観で引いてしまうかもしれないけれど」と彼女は言う。しかし結婚相手となると、喫煙者かどうか、やめることができるのかどうかが気になるという。子供への影響などを考えると、リスクはできるだけ排除したいと考えているようだ。

禁煙ブームに関しては、喫煙を見直すこととして良いことだと述べた。分煙などは、受動喫煙させられる側のことを考慮している行為であり、たばこを吸うことも周りへ配慮する時代なのだと感じていた。喫煙するということが個人だけのものではなく、社会的な意味合いを持つものである。

⑥　Tさん22歳・男性　喫煙・否定派

Tさんは、今日では１日たばこ１箱（20本）を吸う喫煙者である。しかし、もともと大学一年生の時までは、嫌煙派だった。自分が喫煙者になるとは微塵も思っていなかったという。嫌悪を感じたきっかけは、小学生の自分が遊んでいる空間で父親がたばこを吸っていることだった。すでに体に悪いということもなんとなくわかっていた。大学に入学後、仲の良い友達や先輩など周囲に喫煙者が増えてきてからは嫌だという気持ちも落ち着いていった。

大学2年生の頃にスロット屋でアルバイトを始めた。その頃はまだ喫煙しておらず、他人の吸うたばこのにおいや煙の不快感を拭うためにあえて喫煙を始めたという。アルバイトを始めた時期と同時期に失恋を経験し自棄になっていた。

スロット屋でのアルバイト中、ともに働く男性社員と喫煙所で喫煙のきっかけの話題になったことがあった。すると、その社員ももともと非喫煙者であり、自分と同じ理由で喫煙者になったという。そのようなやり取りを他の社員何人かともしており、スロット屋に勤めている男性社員は、もともと喫煙をしていなかったが勤めてから喫煙し始めた人が多いという印象を持ったそうだ。スロット屋といえば喫煙者も多いイメージがあるが、そのような場所では喫煙は連鎖するのかもしれない。

それからは日常的に喫煙をするようになり、4年生である現在は卒制への取り組みから喫煙量が増えたという。作業をしている傍らには常にたばこがあるという。けれども、大学卒業後はやめるつもりでいる。「今は遊びの時期で卒業したらお金や健康について考えることにしている」とその理由を述べた。

昨今の禁煙の風潮については、喫煙者人口が少ないことと人に迷惑をかけているわけだから仕方がないという。とはいえ、東京などの都市部に行った時には肩身の狭さを露骨に感じるという。都市部では、目立つところにある喫煙所はスペースが狭く、立ちっぱなしで吸うところばかりだからだ。自然と隣で喫煙する人と距離が近くなるから、あえて見ず知らずの人にライターを借りて会話を楽しむという。知らない土地で知らない人と自然と話すことができる空気感をもたらすのがたばこだと彼は述べた。

現在彼は喫煙が日常に大きく関与する生活を送っているが、将来、自分が結婚する相手の女性にはたばこを吸っていてほしくないという。自分が今いくらたばこを吸っていても、もともと自身の持つたばこのイメージは良いものではなく、たばこを吸う女性に不安を感じてしまうという。これは健康面だけでなく、イメージの話も含んでいた。たばこを吸う女性に漠然とした「不良」のイメージや、背景に「何か後ろめたさ」を無意識に想像してしまうという。

女性がたばこを吸うことに悪い印象を持つ男性の多さはメディアが広く明らかにしているが、このイメージは昨今の禁煙の風潮以前に、日本の歴史的背景が絡んでいると思われる。第2章で前述した、たばこを吸う女性の歴史が蓄積されたイメージとして現代の若者の中にも巣くんでいるのではないだろうか。

⑦　Kさん21歳・男性　喫煙・肯定派

幼い頃から両親以外でたばこを吸う大人が周りに多かったという。煙やにおいには慣れており、不快感は感じなかった。喫煙への興味を湧かせたのは、好きな俳優やミュージシャンへの憧れだった。きっかけは友人からのもらいたばこだった。彼の場合は、俳優やミュージシャンへの憧れと喫煙が共存していたのだ。自分も喫煙者になることで、”同類”になったかのような感覚があったという。その点では、先に述べたNさんは”同類”になりたくないとの気持ちがあり、先入するイメージの良し悪しによって逆の感情が生まれている。

喫煙してることが発覚した時に好感が持たれることが少ないことに関して、喫煙者の肩身の狭さを感じるという。また、全面禁煙の店が明らかに増えたことから、「吸わない人の希望が反映されすぎているのでは」と語った。

においはむしろ嫌いであり、吸っている時もできるだけ自分ににおいがつかないように、風向きや、換気扇に煙を近づけているという。

自分が結婚を考える頃に喫煙をしているかどうかはわからないが、喫煙経験がある女性の方が好感を持つという。彼のまわりでは、同じ意見を持つ友人が彼以外に2～3人いるという。先のSさんにも言える事であるが、喫煙を経験した身であるから喫煙に寛容なパートナーを選びたいという意識が見える。

聞き取り調査での共通項

＜におい＞

興味深かったのは、吸う人も吸わない人もたばこのにおいには少なからず嫌悪を感じていることだ。7人の中でもたばこのにおいが好きと回答したのはSさんだけであった。たばこが好きだが自分に付着するにおいは嫌いという回答

はKさんで、吸わない頃は嫌だったが今では気にしないと回答したのはTさんである。吸わない頃は、たばこのにおいは他人のもので、他人のにおいがつくのが嫌だったという。今では自分のものなので、くさいという気持ちはあっても気にならなくなったという。対して、Kさんはたばこが燃えている時のにおいは良いと感じるのだが、火が消えた後のにおいが嫌だという。吸っている時は心地よさの方が優っているということだろうか。

喫煙経験ありのNさんも、においに対して強い嫌悪をみせた。Nさんの場合は、そもそも自分が何らかのにおいを纏うことが嫌でたまらないと述べた。同じくにおいに対して強い嫌悪を見せたのはWさんだ。たばこのにおいを感じるとそれだけで嫌と感じるそうだ。たばこが「くさい」と感じられることには、好き嫌いの感情以上に何か別な要因がありそうである。

＜ストレス＞

インタビューをしていく中で、出てくるのが「ストレス」という単語だ。たばこを吸わない、Wさん・Mさん・Yさんに共通していたのが、たばこを吸う人は「ストレスを感じているから吸っている」と理解しているところであり、特にたばこ否定派立場をとったWさんとYさんからは、たばこが喫煙者のストレス緩和になっていることで許せているといった印象を受けた。

Wさんは、圧迫することで無理やり喫煙率を下げようとするのではなく、喫煙のきっかけになったストレスを減らすことができれば喫煙率は自ずと下がるのではと述べた。この指摘は、経済と政治の構造的な思惑を暴く指摘である。たばこは産業として国に管理されているものである。今日でも日本のたばこはたばこ産業株式会社(JT)による製造しか許されていない。かつて政府の財源であったたばこは今も変わらず、税の取れる財源なのである。

＜人とのつながり＞

Mさん・Nさん・Sさん・TさんKさんに共通して話題に上がったのは、コミュニケーションに関することである。Mさんは喫煙を「人を分けている行為」といい、喫煙者同士の結びつきの強さを感じている。Nさんは「喫煙者同士の絆みたいなものがあるのも確かだけど、「たばこを吸っているチーム」になるのがダサい」と否定的な気持ちを述べた。Sさんは「コネクションを作る場になりうる」といい、TさんとKさんは「喫煙所でなら知らない人とも普通に話せる」と独特の空気感を述べた。喫煙者同士のネットワークについて調査を行った入江によれば、「喫煙は人同士の親密さには影響していないが、人と人とのつながりを促進していることは明らか」「ビジネスライクな関係が生まれる」という結果が出た（入江 2016）。つまり、実際の喫煙者が感じていることが証明されている。

聞き取り調査を通して、現代の若者がたばことそれにまつわる問題や出来事に関して思うことをまとめた。以上を踏まえて、アンケートの内容を見ていきたい。

4-3　アンケート調査

12月初旬に本学学生を対象とした喫煙に関するアンケートを実施した。当アンケートは最終的に73人からの回答を得ることができた。このアンケートは大学生の喫煙への意識を多少なりとも明らかにすることを目的としている。アンケートの内容は、性別と年齢、喫煙するしないに関わらず喫煙に嫌悪を抱くかどうかとたばこの嫌いなところを回答してもらい、喫煙の有無と喫煙をする人向けの質問（10つ）と喫煙をしない人向けの質問（4つ）をそれぞれ回答してもらう構成である。

まず、アンケートに回答者の人数・性別と喫煙の有無について表２にまとめた。

総数 73人（100%）	喫煙する	喫煙しない	計
女性	13人（23%）	44人（77%）	57人（78%）
男性	4人（25%）	12人（75%）	16人（22%）

表２ 「喫煙率の男女比」

若者の間では、男女共に喫煙をしない人が圧倒的だということがわかった。それを踏まえてアンケート集計の結果を見ていきたい。

喫煙	計	嫌悪	計	割合
する	18	する	2	11%
		しない	15	83%
しない	55	する	40	73%
		しない	16	29%

表３「喫煙の有無と嫌悪」

表３では、Ｑ１の「喫煙について嫌悪するかどうか」の集計とそのうち喫煙するかどうかの内訳を表にしたものである。これを見ると喫煙をしない人55人中40人が嫌悪すると回答し、７割に相当した。逆に、喫煙する人18人中15人が嫌悪しないと回答した。こう思う理由については「自分が喫煙するから」というものが多かった。後に述べるが、喫煙をしないと回答した人には喫煙しない理由を記述して答えてもらった。

聞き取り調査やアンケート調査を通して顕著に傾向に現れたのは、たばこの嫌悪の点として多くの人がにおい、煙、健康への害の3つを挙げていることだ。

Q2の「嫌悪を自覚したきっかけ」についての回答では、Q1で嫌悪はないと答えた人でも非喫煙者の場合は多く回答があった。反対に、喫煙をする人の大多数はここが未回答であった。「嫌悪を自覚したきっかけ」の具体的な記述で多かったのは、喫煙をしない家族の喫煙に関する回答であり、14件と最も多くみられた。中でも父親の喫煙が14件中9件を占め、日本社会における中年男性の喫煙率の高さが見受けられた。細かく見ていくと、家族の誰かの喫煙によって家や部屋の中がたばこくさくなること、家族内で配慮しないことなどが主な根本理由だった。その次に多かったのは、「におい」についての回答で8件みられた。

健康へ特に、我々20代前半が小学生だった頃の保健の教科書に掲載のあった「健康な人の肺」と「喫煙を続けた人の肺」の画像は印象に強く、聞き取りに際しても頻繁に話題へ上がった。たばこの健康害への認識は、小学校から始まる保健体育や「たばこ・麻薬講習」などの授業による教育的刷り込みが大きいということがわかる。また、実際に喘息などの疾患などで影響を感じる場合や、健康への害を体感した人が近くにいたりする例よりも、「受動喫煙などがあることを知ったから」というような回答の方が多かった。リアルな実例よりも教科書やたばこ教育において知った「たばこは体に悪いもの」という認識の方が先に立っている。

Q3の「たばこの嫌いな点はどんなところか」では、喫煙者にも多く回答が見られた。集計したところ「におい」が38件、「味」が3件、「煙」が35件、「健康への害」が46件となった。複数回答可なことから、この設問の回答者55人中25人は「味」以外の３つを同時に回答した。また、「健康への害」の46件中12件はそれのみの単回答であった。この単回答した人はたばこを嫌悪しないと回答した人と喫煙者にみられた。たばこそのものには嫌悪を抱かないが、健康を害するということについては見過ごせないということだろうか。

先に喫煙者の回答から意識を見ていく。Q5の「喫煙していることを家族は知っているか」では、知っている人が8人と隠している人が9人であり、あまり極端な差は現れていない。回答にも表れている通り、健康への害を懸念する向きを踏まえると、喫煙を打ち明けた時に、嫌な顔をされるだとか怒られるという予想はなんとなくするだろう。成人していれば法的に喫煙は許されているが、社会は喫煙者を「減らそう」としている。そうした風潮があることから喫煙をしていることへの後ろめたさや、親にとやかく言われる面倒臭さが見受けられそうだ。

Q9「どんな時に喫煙したくなるか」については「食後」と「イライラしている時」への回答がどちらも12件で最多だった。またQ10の「我慢できないほど喫煙したことはあるか」という質問でも、「怒りを抑えられない時」という回答が数件みられた。興奮を鎮静させる効果を期待してのことだろう。この質問は依存度を推しはかる目的だったが、喫煙の活用が表れた。

Q11「人間関係に喫煙は必要か」に関しては「必要だと思う」8人、「必要ではない」10人と不要という回答のほうが多く見られた。とはいえ、必要ではないと回答した中に「必要ではないけれど人とのつながりを感じる」「仲良くなる手助けになっていると思う」といういわゆる「たばこミュニケーション」を認める回答も見られた。

Q12「禁煙ブームに対してどう思うか」については、「どうとも思わない」という回答が11件で最も多かった。「疑問に思う」が5件であり、「その他」の回答で「余計なお世話」「少し過剰に思う」「困る」などといった記述もあった。

Q13「健康を害するということにどう思うか」については「その通りだと思う」という回答が13件だった。「その他」が6件あり「どうでもよい」というものから、「たばこの害とストレスを考えるとどちらが健康に影響を及ぼすかわからない」「様々に議論されていて真実がわからない」という意見もみられた。たばこの議論になるとしばしば健康は「肉体だけのものではないこと」を忘れて議論されがちになるが、この「その他」の意見は喫煙者らしい回答かもしれない。

喫煙をしないと回答した人の意見も見ていこう。Q15では「喫煙しない理由」を記述してもらった。最も多かったのは「体に悪いから」「できるだけ健康でいたい」といった意見で、22回登場する。漠然とした健康への被害を危惧するものであった。「お金がかかる」「値段が高い」といった金銭的な

理由が15回と、二番目に登場回数が多い。「喫煙をする理由がない」「魅力を感じない」という関心を示すものが14回登場した。「においがつくのが嫌だから」というようなにおいを理由にしたものは9回であった。さらに「アレルギーだから」「気管支が弱いため」「がんの家系だから」といった具体的な健康への影響を感じた、あるいは危惧したものが7回登場した。メリットのなさを理由にしたものが3回、依存を危惧したものが3回であった。

Q17では「たばこに関しての嫌な経験」の記述は、非喫煙者55人中28人が何らかの回答をした。主な記述の傾向は、「歩きたばこ」「公共の場所での喫煙」など喫煙者のマナー違反を指摘するものが多かった。また「において気分が悪くなった」ことや、「煙が顔にかかった」というような迷惑に関するものが占める。

＜考察＞

全記述回答の中で「におい」42「くさい」2「臭い」14という言葉の登場は58回に及んだ。においに対してポジティブな発言をしていたのは、そのうち2件のみであった。喫煙する人の回答にもにおいに関するネガティブな記述がみられたことから、現代の人がたばこのにおいに相当な不快感を覚えているということは明らかであろう。前節の聞き取り調査でもにおいに関する不快感の高さは表れていた。果たしてこの現象はなんだろう。

今日では若者のたばこの有害性の認知は、非常に高くなっていることがわかった。全記述回答の中で「健康」と「体」という単語が合計で39回登場することからも、その認知度がうかがえる。

「たばこの煙」や「たばこのにおい」はたばこの有害性の認知とともに次第に嫌悪を湧き起こしていったのではないか。たばこの有害性がここまで強く押し出されていなかった頃、そして喫煙率の高かった時代には、たばこのにおいがくさいと感じる人は今よりは少なかったのではないかと推察する。今日のたばこのにおいの嫌われ方を見ていると、たばこのにおいそのものが、“有害なにおい”であるというネガティブなイメージを湧き起こした結果「においが嫌い」という認識になっている。煙についても同じだろう。においのついた煙は目に見えるし、吸い込んだこともわかりやすい。しかもにおいは「移る」し「つく」。

人は、目に見えないものは「移る」気がして恐怖を覚える。例えば、東日本大震災の時の福島原発の事故で放射性物質が外へ流れ出た。震災後、福島県の一部地域の人たちは避難を余儀なくされたが、避難先での迫害やいじめの問題が報じられていたのを覚えている。その際にしばしば「放射能が移る」と言われたという。「放射能が移る」ことはないだろうが、「なんとなく移る気がしてしまって嫌だ」という気持ちがあったのだと思う。言うまでもなく、震災の例はデリケートな問題であるからこれ以上言及しないが、そこには健康を害されるという恐怖が共通している。たばこに関してもその「移る」ことへの恐怖と同じような構図が見えてはこないだろうか。自分の健康が、自分の預かり知らぬところで害される危険性がたばこにはある。しかもたばこにはわかりやすくにおいがついている。

また、現代日本人は衛生に対して過敏なように感じる。誰か知らない人が触ったもの、不特定多数の人が触れるドアなど、触りたがらない人が多い。感染症対策として年中どこでもアルコール除菌を見かける。除菌・抗菌や消臭といった商品を多く見かける。そうした現代の衛生観と、自らにおいを発生させる喫煙行為の関連性が気になってきた。

本研究の最大の反省はこの「衛生観」と「におい」にまつわる先行研究まで手が回らなかったことである。今後の課題としたい。

5. 終わりに

たばことは不思議なものであった。調べれば調べるほどに膨大な史料、文献、書籍が次から次へと出てくる。本論文ではほんの一部分のみしか紹介することができなかったと反省している。しかしながら昨今では、2020年に東京で予定されているオリンピックの影響も大いに受けながら、禁煙の風潮は止みそうにない。制度的な取り組みや各所の思惑が入り込んでいるとみられる。たばこに依存性がある以上たばこを吸う人がいなくなることはないだろうが、若干の上下をしながらも喫煙者人口は確実に減っている。喫煙者がマイノリティになればなるほど肩身の狭い思いをすることは明らかである。

論文のはじめで述べた通り、私がこの論文を書く目的は問題提起である。私自身もたばこへの認識は嫌煙の立場からスタートしたし、今でも喫煙の良さはよく分かっていない。正直に言えば、味が美味しいと思ったことも、心地が良いと思ったこともほとんどない。たばこを吸うと喉がイガイガするし、煙を吸うこと自体は体に良いはずがないとも

思っている。それでも、たばこは一つの文化であると私は思う。いくら健康に悪くても、それに癒される人がいて、それに救われている人もいる。逆に、それに人生を狂わされた人や、失ったものが大きい人もいるだろう。それを好む人、嫌悪を抱く人両方いて当然だ。むしろ良い面と悪い面どちらも包括してこその文化である。確かに喫煙は体によくはないだろう。けれども、健康に良いことだけが残された社会とはどんなものだろうか。せわしなくキナ臭い世の中だからこそ、もっと人に目を向けることで現代社会ならびにこれからの人間社会がより良いものであってほしいと願うばかりだ。

本研究がたばこ研究に大きく寄与できたとは思えないが、今一度、たばこの側面を思い出して欲しいと思う次第である。

本稿を書くにあたって、様々なお力添えをいただきました。まず、厚くご指導くださった謝黎先生に深謝いたします。さらに、アンケートの配布に協力くださった久保田力先生、資料を提供してくださった公益財団法人たばこ総合研究センターの松永七美様、アドバイスを下さった先生方、インタビューに応じてくれた友人たち、アンケートに回答して下さった多数の方々に支えていただきました。私一人の力では到底辿り着くことのできない道だったと感じています。協力して下さった皆様へ心からの感謝と御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

参考文献

宇賀田為吉
1973『たばこの歴史』岩波新書
川床邦夫
2007『世界たばこ紀行』山愛書院
鈴木達也
2015『世界喫煙伝播史』世界思想社
高田公理
2008『嗜好品文化を学ぶ人のために』思想各出版
田中冨吉
1995『TABACCO産業史資料NO.20日本のたばこ歴史と文化—』（財）TASCたばこ総合研究センター
1996『TABACCO産業史資料NO.21続・日本のたばこ歴史と文化—』（財）TASCたばこ総合研究センター
たばこと塩の博物館編
1987『ポスター1』
長谷正視
1993『TABACCO産業史資料NO.19（'93.12）日本・たばこの歴史』（財）たばこ総合研究センター
半田昌之
1987「近代日本のポスター」『ポスター1』たばこと塩の博物館P186-194
北海道立北方民族博物館編
1996「たばこ その歴史と文化」『第11回特別展たばこと民族文化～たばこが北方へ伝わるまで～』北海道立北方民族博物館
本島　進
2008『たばこ喫みの弁明』筑摩書房
和田光弘
2004『たばこが語る世界史』山川出版